

愛宕臨床栄養研究会（ACNC）第62回学術研究会

—— 摂食障害 ——

日 時：平成20年3月14日 午後6時-7時30分

会 場：東京慈恵会医科大学 西新橋校 5階講堂

司 会：松藤 千弥（東京慈恵会医科大学分子生物学講座）

演題：摂食障害の現状とそのサポート

東京慈恵会医科大学精神医学講座

中村 晃士

近年、摂食障害は頻りに増え、増加の一途をたどっている。しかし、一口に摂食障害とは言ってもさまざまな臨床像を含んでおり、また以前のいわゆる拒食症からは大きく変化してきているという現状がある。臨床栄養に関わる医療者の多くにとって、摂食障害の現状を知る機会は少ないものと考えられる。本講演では、現在までの摂食障害の研究の流れと、現時点での摂食障害患者に対するアプローチの仕方についてまとめる。

1970年代から、摂食障害の中でも神経性無食欲症（拒食症）が注目を集めた。当時の拒食症の患者たちは、るいそう、やせ願望、肥満恐怖、ボディイメージの障害、過活動といった症状を持ち、基本的にはいわゆる「いい子」、「手のかからない子」というのが特徴であった。しかし、その後神経性大食症（過食症）の出現により、この概念が大きく様変わりすることとなる。衝動行為、強迫行為のひとつとされる過食症状を持つ新しいタイプの摂食障害患者は、その人格傾向としても衝動的で、

対人関係も不安定であり、いわゆる境界性パーソナリティ障害の合併が多い。拒食の時期があるかと思えば、過食嘔吐に至り、また衝動行為、自殺企図などにより周囲を巻き込むような症例が増えた。その結果、それまでの単なる治療的アプローチでは太刀打ちできなくなり、それに代わる新しい手法が必要となってきた。前述のとおり、摂食障害の患者自体が増加するとともに、病態も多様化しており、その背後にある人格、機能水準に合わせたアプローチが重要となってきているのである。

また、衝動行為の一部としての過食、嘔吐そして下剤の乱用などのために、摂食障害患者の死亡率はいまだに高く、いくつかの研究では10%台の死亡率の報告がなされている。したがって、患者の身体管理、栄養指導は必要不可欠である。ところが、本疾患に特有の患者の対人関係の不安定さから、医療を受けるという行為においても困難さがつきまとうのである。一方、認知の歪んだ患者にとっても客観的な立場からの栄養指導の意味は大きい。摂食障害患者の栄養指導に関わるメディカルの方たちが、患者の背景を理解しながら援助することが極めて重要であるといえる。